

備陽史探訪

第32号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市西深津町7-2-7
 印刷所 塩出印刷

〈特集〉

水野勝成

会報編集部

十月十九日福山城月見櫓で、水野勝成について座談会を催しました。約三十人の参加が有り、盛会でした。そこで当日参加された方の中から、後藤、吉田、森の三氏に改めて水野勝成について想うところを述べていただきました。それぞれにユニークな視点から考察していただきましたので読者の皆様にもきつと興味深い文章と思います。

水野勝成について

吉田 和隆

先日広大教授、青野春水氏の話聞いた。この中で、福山で新田開発が盛んに行なわれた頃は、他地域でも同様で、史上例を見ない程耕地が増加した時代である、との指摘があ

った。

又神辺から福山へ本拠を移したのは、山城から平城へ、軍事より交通重視という時代の流れによる物と思う。デルタに城下町を築くのは、福山より前に毛利輝元が大名達の失笑の中で苦勞して広島城下を建設しており、福山が最初でもない。

つまり勝成の功績としてよく言われる、福山の地の選定、芦田川デルタへの城下の建設、大規模な新田開発といった事業は、時代がさせた事であり、勝成に卓越した内政手腕があるからできた、なんて事はないと思うのである。

又それ等を発案、実行したのは多分家臣達で、彼はただ「ゴー」のサインを出しただけではないか。戦争のエキスパートとして半生を送って来た人間に、内政や土木の事がどれ程わかるか疑問に思うのである。部下の功績がその人の物にされず、長の物になってしまうのは、よくある話だ。

ところで他県の人に、勝成は知られているのだろうか。「水野勝成、誰それ？福山、それどこ？」がいい所だろう。図書館で郷土史以外の歴史の本をパラパラ調べてみると、意外に彼の名は出てこない。せいぜい関ヶ原の合戦と、大阪夏の陣に端役として出る位で、阿部正弘とは好対象だ。

正弘は幕末に活躍した老中として全国にも知られた福山藩主だと思う。最近では手塚治虫氏が、歴史漫画「陽だまりの樹」の中で、開明的な政治家として好意的に描いていた。彼は福山にあまり居らず、中央の政界で活躍したせいも、地元ではあまり評判はよろしくない。だが最近の政治の風潮、国政はそっちのけで地元への利益誘導に狂奔する国会議員が大量得票する現代こそ、正弘的政治家が望まれている、ナーンて思うのだが。

話がずれた。ともかく勝成は、優秀な軍人であった。負けを知らない云々は、「転進」と称しては敗走した「無敵皇軍」みたいに盾に唾とは思うけど。でも軍人として最重要の素質の「勇気」は十分過ぎる程持っていたし、家康もその軍人としての才能を見込んで、重要な合戦には困

難な部署に彼を配している。軍人水野勝成はやはり大した人であった。

私が想う水野勝成

後藤 匡史

水野勝成について書くと云われてハタと困った。まったくもって若い時の勝成と福山へ入国してからの勝成の諸行が不可解である。

戦場にあつては鬼日向と恐れられ、又、親に勘当されて諸国を流浪、その時の思いが身にしみてか藩主になつてからの行動が民への思いやりがわかるのか創生期の大名と云うものは生きるか死ぬかの瀬戸際を生きぬいてきたから事情が良くわかる。ところが二代、三代頃になると徳川家光ではないが、余は生まれながらの將軍であると云わしめたことでもわかる様に、それがあたりまえになつてくる。

しかし、ここ水野氏五代八十余年間福山在世中代々の藩主が良く治めたことは奇異である。これも勝成の功績であろうか。私は勝成が適応力のあつた藩主でなかったかと思えてならない。私事であるが、ちなみに勝成が福山入国の日が私の誕生日と同じ日をつけくわえる。

「マンガ・福山の歴史」

を読んで

森 紀子

マンガ福山の歴史・水野勝成がコピーライターの中山善照氏によって刊行されたのは、皆様御承知の通りです。そしてそのマンガを子供達のみならず、大勢の大人が手にした事で福山市で一躍ベストセラーになりました。福山の原点がマンガという形で表現され、マスメディアに乗りアツという間に市民の中に滲透したのは驚異的な出来事です。

このマンガの意図するところは市民が自分達の住む町の歴史をあまりにも知らなさすぎる事への警鐘とも受け取れますし、又、郷土史家が分り易く市民に知らす努力を怠っている事への痛烈なアイロニーとも受け取れます。

歴史家ではない中山氏が福山草創の原点を見据えて、もつともイメージに受け入れられるマンガにされた事は、郷土史研究に多少なりとも関っている私にとって些かショックでした。

私は数年前、中山氏の著書「水と焰」を読んだ事があります。その本

は歴史的な裏付けがなされていず、数ヶ所間違った記述がありましたけれど、大変おもしろい本だなという印象がありました。それは中山氏がコピーライターであり文章が巧みだったからでもあるでしょう。気軽に読める小説のようにイッキに読み上げたものでした。

今回のマンガはこの「水と焰」をそのままベースにしてあります。従ってマンガの中にも又、間違った記述があります。たとえば、神谷治部の福山城築城時の普請奉行説などがそれです。この神谷治部については数年前、平井隆夫先生が「文化財ふくやま」第十八号に投稿されています。御存知でない方の為に、あえて簡単に記述すれば、神谷治部長次は水野勝成の家臣ではなく、子供の頃より二代目勝重（勝俊）に仕えていた側用人です。福山城築城時の元和六年には李之丞と名乗ってまだ二十才そこそこの若者でした。当然普請奉行の要職に付くような年令ではありません。治部という名前に改称したのは小場家文書によれば、勝重が二代目を相続した寛永十六年です。

しかし、私は中山氏のマンガにケチをつける気はありません。間違っ

た記述があったとしても、それは瑣末な事です。些細な事を深く深く追求していくのが歴史研究家の常ですが、マンガにそこまで求める必要はないと思うからです。

一般的には歴史は取っ付きにくく、小難しいものというイメージがあるようです。そのイメージを払拭する為にも本来ならば、福山の歴史は郷土史研究家の手によって分り易くマンガにされるべきでした。そこに思い至らなかつた訳ではなかつたのですが、それをあえてしなかつたのは、たかがマンガという意識がどこかに働いていたのかも知れませんし、又、狭く深く研究し、複雑かつ専門化する事がよりレベルの高い歴史家たり得ると錯覚し、思いついていた節もあります。素人郷土史研究家が落ち入り易い偏狭な研究姿勢に、大局的なものの方を示した中山氏は良くも悪くも強烈な印象を与えました。

郷土史研究に携わる私達はことさら難解な専門用語を羅列することによって自己満足する狭い自分だけの世界に埋没することなく、もつと広い視野に立った歴史研究を今一度考え直す必要がありはしないでしょうか。

中山氏は現在鞆の浦の歴史を、マンガとして執筆中のようです。このマンガが出来る過程をホームテレビが取り上げ、今三十分の番組として製作が進められています。又々このマンガが柳の下の二匹目のドジョウになる公算大です。多くの福山市民に啓蒙しつつ、かつ商業ベースに乗せて大儲される中山氏に脱帽です。



国東半島を巡りて

高橋 安子

九月十四日晴天に恵まれて、初秋の宇佐・国東半島へと旅立つ。一行二十三人で福山駅から新幹線で小倉に着き、特急で宇佐到着。以後はバス旅行となる。宇佐神宮に着いて昼食。参道の大鳥居の前で、記念写真をとる。楠の木洩れ日のなかを暫く進むと本殿に着く。

境内には白い玉砂利が敷かれて、丹の色も鮮やかに、三つの御殿が並び建ち、威風堂々たるもの。全国四万余社の総本山であり、国宝である。後藤氏の説明も加わり印象に残った。宇佐民俗資料館には、古墳からの出土品や、仏像の模作品等、数多くの国東文化が一堂に集められ良く理解できた。胎蔵寺へ登る道は険しく、中腹の左側の岩山に、彫られた熊野摩崖仏不動明王は、如何にも勇壮な様相であるが、忿怒相というよりむしろ柔和は相貌である。向って右の大日如来の方は、全体的に大造りであり、眼を閉じた像容であり、眼を閉じた唇は固く結ばれているが、ふくよかな御容貌には恩情が満ちていた。

念願の大日如来を拝し、名残を惜しみながら山上の胎蔵寺へ登る。次の真木大堂には、牛の背に乗る大威徳明王の像があり、元宮磨崖仏は五体並び、木組の穴が残っていた。一路三林亭について夕食をとる。会長と当主と懇意な仲で、大サービスして頂き、舞台では舞踊あり、歌あり、果てはみんなで輪になって踊る等、楽しい一夜でした。

翌朝東光寺に五百羅漢を拝す。従来のイメージとは違う表情に不思議な安堵感を覚える。

財前家の墓地には、上部が弓状になり、前に倒れる型の珍しい板碑を見た。国東半島は石造美術の宝庫で、国東塔はいたる処に存在し、大衆の信仰の表れである。両子寺の、護摩堂本尊は、大聖不動明王なり。苔蒸した石段を下り、一對の仁王像の前で、記念撮影する。富貴寺の大堂は閉ざされていたが、資料館で内陣の壁面の模作を見ていた。麓で昼食をとらされた、川中不動明王を拝す。帰路、竹田津に向う。遠くに見える丘は黄金色に輝き、空の青、山の緑に包まれた神仏混合の里。雄大な国東半島にもやがて実のりの秋が深まるでしょう。

連絡船で徳山に上陸、全員無事福山駅に帰着。今回は数多の神仏の御威徳に接し、心暖まる幸せな旅でした。神谷先生はじめ同行の皆様、お世話になり有難うございました。

因島白瀧山登山記

塚本 彰

友人から聞いて行くことにした。二号線から尾道大橋を渡り向島へ……道が分らないので地元民に聞く。高見山を越えて立花の海岸に出る。さて大橋への道は？ あっあそこだ。蛇がうねる如く道を登ると出た大橋へ。さすが天下の名橋因島大橋。其の雄大なること！ いかにな代科学のスイを集めたとは云え何万何千万屯の重量をよくも支えたものだ。渡りて右へ重井へと行く。見えた白瀧山登山口。入って行くこと立札有り。五百羅漢創建者伝六の一代記が詳しく記して有る。

仁王門をくぐり登って行く中腹に八十五番札所八栗寺有りなおも登って行くとうやく頂上に着く。(二七七m)。十一面観音をお祭りしてあるお寺、自然石を利用した巨大な多宝塔、巨大岩石に刻まれた仏像と

文字、高さ二メートルもあるお釈迦様、弘法大師、文珠菩薩、普賢像、伝六夫妻像、其の両面に整然と並ぶ数多くの無名石仏其の数正に七百倍、福山近辺では見られぬ石像の宝庫だ。眼をとして二百年前を偲ぶ。何人、何十人の石工がドンガドンガとハンマーを振ったであろう。それを助ける多数の信者、食料を運ぶ百姓、ただしをする女性、山はたいそう賑ったであろう。かくて、四年の歳月を経て完成、近遠からの参拝者もぞくぞくと続いた事と思われる。

又、眼を転んずれば眼下に因島大橋、瀬戸内に浮ぶ島々、景色も万点だ。時のたつのも忘れて眺めていた。だがいつまでもという分けにもいかにぬ。名残おしんで帰路についた。



私の好きなもの 「地図」

七森 義人

私が一番良く使う物と云う事で地図についてふれてみる。

地図と云って、一番良く使うのはやはり、「2.5万分の1」の地形図が多い。まったくの土地不案内の者でも、どこに何が有るか分かる為に、山に、旅にと、何でも使用できる。

道の無い山でも、尾根もしくは、植林界には獣道が付いていたり、飲水の時は谷川、滝、崩状の谷等を捜すと見つかりやすい。現地に行かなくても山頂からの眺望範囲もわかる。

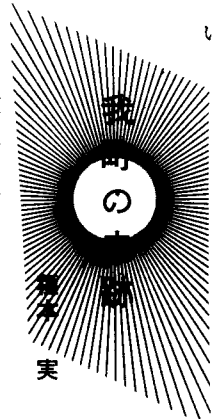
地図と云っても種々有り、日本最古の地図は、「壑田図」、「開田図」と呼ばれる物で、村(荘園)等の絵図で、地籍図の様な物があり、その後、行基の日本図(団子図)が出来、此は江戸時代の赤水図、実測された伊能図となり、更に陸測の20万分の1へと発展して、現在の2.5万分の1となった。

地図は実形を表示した基本地形図と、目的物以外を省略したカルトグラムに分けられる。

此地図を見れば、珍しい地名

や、変わった地形、縮尺が大きくなれば、小祠や石仏の出ているものもあり、民俗調査にも利用でき、河岸に有る道は昔は使用されていない物が多い為に峠越えの小さな道が以外と重要な事が有る。廃道もあれば、廃トンネル、廃坑も有る。まったく知らない土地が、読めば読むほど、わかってくる。小さな道に石仏を祀っていたら、土地の人の信仰の一部を物語る。此様に色々な事を私に語ってくれる。

以上のように一枚の図から色々わかる、皆様もぜひためしてみてください。



実

私の住む福山市川口町東は水野勝成の曾孫勝種により寛文十一年(一六七二)に築成された土地であります。現在川口町一帯では都市政策に従って大規模な下水道工事が行なわれていて、地下数十米を掘り下げていますがそこからは海底の泥と共に貝ガラ等が多数見出されることから、三百年前迄が海であったことが証明されます。

貝ガラ等は自然の史跡と言えるかと思いますが人間の手による史跡となると神社・仏閣しかなく 以下に述べてみます。

観音さん

中国バスの福山駅→新浜線に「観音堂」と名のつくバス停があります。私も子供の頃境内でよく遊んだのですが、現在はバス停の地名だけ残っています。古くは寛政六年(一七九四)水野藩士青木某が地元の与三郎と力を合わせて観音菩薩をお祀りしたがその後妙政寺の住職日登上人が守妙院を作って隠居した際に境内に移転したと伝えられています。妙政寺にお尋ねしたところ、守妙院が妙政寺へ併合された時観音さんも移ってきたらしい、とのことです。

守妙院

川口町東のさらに東、入江にそって甘山新開と呼ばれた土地がありました。昔、福山藩の抱え力士に甘山(はたちやま)という強い力士がいて、殿様の前で出世角力を取った時ほうびとして入江の一隅を甘山に与えたという由来がある土地です。この甘山新開の東南にあって釈迦如来を本尊とした日蓮宗の寺院で、文化十年(一八一三)日登上人開基

(妙政寺隠居所)といわれ、のち区画整理等により妙政寺へ併合されました。

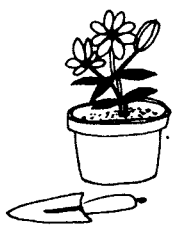
玄蕃社

守妙院の西側にある石碑。川口新開東半分の担当者であった上席家老上田玄蕃直次の功績を讃えています。昭和四十四年設置。

川口八幡社

天和三年(一六八三)川口開発十三年目に福山吉津の東宮から現在地に勧請されたと神社由来にあります。昭和四十六年には川口築成三百年行事が盛大に行なわれ、境内には記念碑が設置されました。現在でも初詣、秋祭り、七五三など地元との結びつきは強いものがあります。

以上川口町東の史跡について述べてまいりました。古老の方にお尋ねすれば他にもあるのですがそれは又の機会に。
(参照文献 川口築成三百年史)



『城研ニユース』 No.3

城郭研究部会

☆城郭講座終る、締め括りは神辺城跡上の「後藤節」

十月二十六日、色づき始めた山の木立の中、城郭研究会現地講演会（第五回城郭講座）として老若男女三十五名、神辺町の神辺城跡へ登った。神辺城は又、黄葉山城とも云って中世南北朝時代より江戸初期まで二八〇余年間、備後の主要城郭であった。私が講師を務めて神辺城の出来事を年表方式にて、次に山下さんが城の構造、又、七森さんが神辺の概略を話して、最後に探訪会副会長の田口さんが締め括って山上にて昼食。その後、神辺町立歴史民俗資料館では昭和六十一年度秋季特別展『神辺の歴史文化』展が開催中で全員で見学、山麓では菅茶山の幕所に参拝。最後に天別豊姫神社では丁度秋の「大祭」中で境内の「若戸神楽」を横目で見ながら人ゴミの中を参詣。そして神辺駅よて福山方面の人と神辺附近の人とに分れて解散した。三百年間、幾多の攻防を繰返して来た城跡も近年整備されて、春は花見、

秋は紅葉と人々の憩いの場所として親しまれている。

城山に上りて淋し秋の風

兵どもの夢を語りて後藤匡史記

報告 第四回城郭講座、九月七日午後福山城湯殿に於て開催。田口義之

講演『備後戦国史』、聴衆三十一名。部会活動予定

◎十一月三十日(日) 駅家町服部

『棕山城跡』の探訪。別記参照。

◎十二月十四日(日) 芦田町福田

『利鎌山城跡』の調査。別記参照。

部会に就ての問合せは

〒七二〇 福山市多治米町九一六

田口義之まで

TEL〇八四九(五三)六一五七



古墳研究会情報

山々の紅葉も盛りとなり、ようやくと言った感じで古墳の調査に最適な季節となりました。当部会での秋から春にかけての活動は、二基の古墳の測量の実施を目標としております。先ず一基は、一昨年測量しました福山市加茂町の正福寺裏山古墳のすぐ近くの合ノ坪古墳です。ここは十一月初旬より、土地の所有者の許可を得て測量の為の前段階として、下草刈りを行っています。しかし、予想以上に草木が繁茂している上に人手不足も手伝い中々思う様に捗らずに困っております。

予定としては、十二月初旬より早速測量を開始したく思っています。又、「古墳ガイドブック」(仮称)の方も完成に近づきつつあり、只今全体の手直し作業の真最中です。

△古墳研究会への参加者募集▽

今回の測量調査に参加されたい方、あるいは古墳や古代史に興味をお持ちの方、今より千数百年という時間をみつめてみたい方等々私達と一緒に

に山野を歩いたり、あるいはその中で、古墳や古代史の話に花を咲かせてみませんか。

当部会では部会参加者を募集しています。

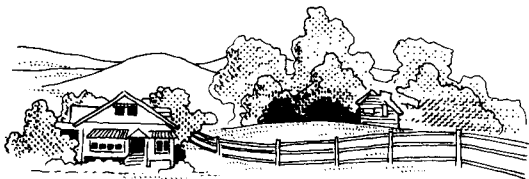
ドシドシ参加して下さい。

詳細は左記まで。

〒721 福山市引野町二丁目三二八

山口 哲晶

電話(四一)二〇四九



城郭部会行事案内

☆駅家町『掠山城跡』の探訪

掠山城跡本丸にて田口部会長の講演「掠山城と桑原氏」の後、城跡の調査を行なう

日時 十一月三〇日(日)

集合 午前八時三〇分 福山駅前

釣人像前(時間厳守)

会費 三〇〇円 但バス代別

備考 弁当持参、山歩き出来る服装で。雨天中止

☆吉田町『利鎌山城跡』の調査

部会員山下好和さんを中心に、中世山城利鎌山城の測量調査を行います。戦国山城のナゾに迫ります。

日時 十二月十四日(日)

会費 実費を頂きます。

備考 弁当持参、山歩き出来る服装で。雨天中止。

参加方法 十二月七日迄に田口までTELか葉書で申し込んで下さい。

問い合わせ先

〒七二〇 福山山多治米町九一六

田口義之 方

TEL〇八四九(五三)六一五七

／ 城郭部会は皆さんの部会です。老若男女どなたでも参加できます。"お城"に興味ある方、戦国時代の好きな人、集まれ。

十二月例会の御案内

『初冬の河佐峡に戦国の面影を訪ねて』

府中市久佐町の史跡を見学します。

(二子山城、竹馬寺跡中世墓石群、安全寺榑崎氏墓地、石垣八幡社等)

講師 城郭研究部会

期日 十二月七日(日)

集合時間及場所 午前七時三〇分

福山駅前釣人像前(七時五〇分発)

福塩線下り電車)

会費 三〇〇円(非会員五〇〇円)

但し、電車賃は別

備考 弁当持参 山歩き出来る服装

雨天中止

問い合わせ先 田口義之 方

TEL〇八四九(五三)六一五七



編集後記

・菊も終り、今年も残り少なくなりました。

予定では十月末に発行の会報をやっとお届けすることとなりました。来年は新体制のもとでより素晴らしい会報になりますので、原稿を奮ってお寄せ下さいますようお願いいたします。

・「我町の史跡」、「私の好きなもの」等、地域の中、暮らしの中を見つめて、改めて再発見したことを気軽に書いて下さい。

◎投稿先

〒720 福山市川口町三九八―十三

種本実 迄